

# 超高齢者 激増時代 の病院経営戦略

企画：松田 晋哉（産業医科大学医学部公衆衛生学教室教授）

高齢化の進展が医療現場に対応の変革を求めている。急性期病院においては脳梗塞や股関節骨折といった入院目的の傷病の治療に加えて、高血圧や認知症などの併存する慢性疾患の治療やADLの維持向上のためのリハビリテーションやADLケアの必要性が高まっている。また、回復期リハビリテーションでは、重症度基準の導入により、従来よりも看護や介護でのケアを必要とする患者が増加し、現在の人員基準では対応が難しい状況が生じている。

今回の特集では、このような高齢化の進展が、入院医療にどのような影響を及ぼしているかについて、現場の状況を明らかにし、今後の改善に向けた提言を行うことを目的とする。

## 本特集の論旨が分かる Point 一覧

p.20

社会の高齢化に伴い複合的な医療介護ニーズを持った高齢患者の入院が増加している。この変化は、入院医療体制の在り方、救急医療の体制、職種間連携および施設間連携の在り方に変革を求める。地域医療構想調整会議では、高齢化の進行に対応するために具体的な医療提供体制の変革について議論することが必要である。

p.28

急性期医療における高齢患者の急増と、それによる医療費の増加は、財政当局から目の敵にされ、診療報酬改定の議論も常に圧縮の方向に誘導される。医療技術の進歩によって、侵襲性の高い治療が高齢者にも適応拡大され、その一方で高齢患者の介護需要が増大する等、厳しくなる一方の急性期医療の現場の状況を直視すべきである。

p.36

高齢化と現役世代の減少が日本の医療介護提供体制に影響を及ぼしている。要介護者や寝たきり状態の削減が解決策となる中、回復期リハビリテーション病棟は寝たきりを防ぐ「最後の砦」としての役割を果たしている。今後もこの役割を維持するためには、急性期、回復期、在宅とそれぞれの機能向上が必要である。

p.42

ケアを要する高齢者が住み慣れた地域で安心して生活を送るためには、シームレスな医療・介護サービス提供を行うことが重要である。函館市医療・介護連携協議会では、地域で質の高いサービス提供体制構築のため2018年より地域で統一された情報共有ツール「はこだて医療・介護連携サマリー」を作成し、医療と介護の多職種による内容にばらつきのない迅速かつシームレスな連携を実現させ、ICT 連携にも注力している。

p.50

高齢者にふさわしい医療・ケアを提供していくためには、統合的に患者を看てケアを提供していく必要がある。また、エンド・オブ・ライフ・ケア (EOL ケア) の提供も重要である。看護職は高齢者の特性を理解し、個々の高齢者に合ったケアを提供するためのスキルを日々磨いていく必要がある。